

Classics of Philosophy in Japan 2

西田幾多郎

善の研究



CHISOKUDŌ

PUBLISHED BY Chisokudō Publications
Nagoya, Japan
<http://ChisokudoPublications.com>

SERIES Classics of Philosophy in Japan, 2
© Chisokudō Publications, 2016, 2021

COVER DESIGN Claudio Bado

ISBN 979-8377327936

JAPANESE TEXT

The interlinear numbers in the text refer to the pagination in the original and new editions of Nishida Kitarō's *Complete Works*:

Original edition (pagination in italic type)

「善の研究」『西田幾多郎全集』岩波書店、1975年、I: 3–200.

New edition (pagination in regular type)

「善の研究」『西田幾多郎全集』岩波書店、2003年、I: 1–159.

TRANSLATIONS

Marginal annotations on even-numbered pages of the text refer to the pagination of the following translations of the work:

- C Chinese translation (simplified characters). 《善的研究》, trans. by 何倩. 北京: 商务印书馆, 1965年.
- E English translation. *An Inquiry into the Good*, trans. by Masao Abe and Christopher Ives. New Haven: Yale University Press, 1990.
- F French translation (partial). *Essai sur le bien, chapitre I & II*, trans. by Ōshima Hitoshi. Paris: Éditions Osiris, 1997.
- G German translation. *Über das Gute*, trans. by Peter Pörtner. Frankfurt: Insel, 1989.
- I Italian translation. *Uno studio sul bene*, trans. by Enrico Fongaro. Torino: Bollati Boringhieri, 2007.
- K Korean translation. 『善의 연구』, trans. by 徐石演. 서울: 汎友古典選, 2014年.
- R Romanian translation. *O cercetare asupra binelui*, trans. by Nicolae Mariş and Mircea Itu. Braşov: Editura Orientul Latin, 2005.
- S Spanish translation. *Indagación del bien*, trans. by Albert Luis Bixio. Barcelona: Gedisa, 1995.

目次

善の研究

版を新にするに当って	1
再版の序	3
序	4
第一編 純粹経	
第一章 純粹経験	9
第二章 思惟	16
第三章 意志	24
第四章 知的直観	33
第二編 実在	
第一章 考究の出立点	41

第二章	意識現象が唯一の存在である	46
第三章	存在の真景	51
第四章	真存在は常に同一の形式を有っている	55
第五章	真存在の根本的方式	59
第六章	唯一存在	63
第七章	存在の分化発展	67
第八章	自然	71
第九章	精神	76
第十章	存在としての神	82
第三編 善		
第一章	行為 上	89
第二章	行為 下	94
第三章	意志の自由	97

第四章	価値的研究	102
第五章	倫理学の諸説 その一	105
第六章	倫理学の諸説 その二	109
第七章	倫理学の諸説 その三	113
第八章	倫理学の諸説 その四	117
第九章	善（活動説）	123
第十章	人格的善	128
第十一章	善行為の動機（善の形式）	132
第十二章	善行為の目的（善の内容）	136
第十三章	完全なる善行	142
第四編 宗教		
第一章	宗教的要求	149
第二章	宗教の本質	153

第三章	神	157
第四章	神と世界	166
第五章	知と愛	172

版を新にするに当って

この書刷行を重ねること多く、文字も往々鮮明を欠くものがあるようになったので、今度書肆において版を新にすることになった。この書は私が多少とも自分の考をまとめて世に出した最初の著述であり、若かりし日の考に過ぎない。私はこの際この書に色々の点において加筆したのであるが、思想はその時々⁶に生きたものであり、幾十年を隔てた後からは筆の加えようもない。この書はこの書としてこの儘として置くの外はない。

今日から見れば、この書の立場は意識の立場であり、心理主義的とも考えられるであろう。然非難せられても致方はない。しかしこの書を書いた時代においても、私の考の奥底に潜むものは単にそれだけのものでなかつたと思う。純粹経験の立場は「自覚における直観と反省」に至つて、フイヒテの事行の立場を介して絶対意志の立場に進み、更に「働くものから見るものへ」の後半において、ギリシャ哲学を介し、一転して「場所」の考に至つた。そこに私は私の考を論理化する端緒を得たと思う。「場所」の考は「弁証法的一般者」として具体化せられ、「弁証法的一般者」の立場は「行為的直観」の立場として直接化せられた。この書において直接経験の世界とか純粹経験の世界とかいったものは、今は歴史的事在の世界と考えるようになった。行為的直観の世界、ポイエーシスの世界こそ真に純粹経験の世界であるのである。

フエヒネルは或朝ライプニッツのローゼンタールの腰掛に休らいながら、日麗に花薫り鳥歌い蝶舞う春の牧場を眺め、色もなく音もなく自然科学的な夜の見方に反して、ありの儘が真である昼の見方に耽つたと自らいつている。私は何の影響に

版を新にするに当って

C 2-3
E xxxi-iv
F 14, 12
I 8, 5
K 12-13
R 38,
35-6
S 38, 35

よったかは知らないが、早くから実在は現実そのままのものでなければならぬ、いわゆる物質の世界という如きものはこれから考えられたものに過ぎないという考を有っていた。まだ高等学校の学生であった頃、金沢の街を歩きながら、夢みる如くかかる考に耽ったことが今も思い出される。その頃の考がこの書の基ともなったかと思う。私がこの書を物せし頃、この書がかくまでに長く多くの人に読まれ、私がかくまでに生き長らえて、この書の重版を見ようとは思ってもよらないことであつた。この書に対して、命なりけり小夜の中山の感なきを得ない。

昭和十一年十月

著者

再版の序

この書⁵を出版してから既に十年余の歳月を経たのであるが、この書を書いたのはそれよりもなお幾年の昔であった。京都に来てから読書と思索とに専なることを得て、余もいくらか余の思想を洗練し豊富にすることを得た。従つてこの書に対しては飽き足らなく思うようになり、遂にこの書を絶版としようと思つたのである。しかしその後諸方からこの書の出版を求められるのと、余がこの書の如き形において余の思想の全体を述べ得るのはなお幾年の後なるかを思い、再びこの書を世に出すこととした。今度の出版に当りて、務台、世良の両文学士が余の為に字句の訂正と校正との労を執られたのは、余が両君に対し感謝に堪えざる所である。

大正十年一月

西田幾多郎

再版の序

C	5-6
E	xxix-xxx
F	11-13
I	3-4
K	10-11
R	33-4
S	33-4

序

この書は余が多年、金沢なる第四高等学校において教鞭を執っていた間に書いたものである。初はこの書の中、特に実在に³₆関する部分を精細に論述して、すぐにも世に出そうという考であったが、病と種々の事情とに妨げられてその志を果すことができなかった。かくして数年を過している中に、いくらか自分の思想も変り来り、従つて余が志す所の容易に完成し難きを感じるようになり、この書はこの書として一先ず世に出して見たいという考になつたのである。

この書は第二編第三編が先ず出来て、第一編第四編という順序に後から附加したものである。第一編は余の思想の根柢である純粹経験の性質を明にしたものであるが、初めて読む人はこれを略する方がよい。第二編は余の哲学的思想を述べたものでこの書の骨子といふべきものである。第三編は前編の考を基礎として善を論じた積であるが、またこれを独立の倫理学と見ても差支ないと思う。第四編は余が、かねて哲学の終結と考えている宗教について余の考を述べたものである。この編は余が病中の作で不完全の処も多いが、とにかくこれにて余がいおうと思つてゐることの終まで達したのである。この書に特に「善の研究」と名づけた訳は、哲学的研究がその前半を占め居るにも拘らず、人生の問題が中心であり、終結であると考えた故である。

純粹経験を唯一の実在としてすべてを説明して見たいというのは、余が大分前から有つていた考であつた。初はマツハな⁷どを読んで見たが、どうも満足はできなかった。そのうち、個人あつて経験あるにあらず、経験あつて個人あるのである、

個人的区別より経験が根本的であるという考から独我論を脱することができ、また経験を能動的と考へることによつてフィヒテ以後の超越哲学とも調和し得るかのように考へ、遂にこの書の第二編を書いたのであるが、その不完全なることはいうまでもない。

思索などする奴は緑の野にあつて枯草を食う動物の如しとメフィストに嘲らるるかも知らぬが、我は哲理を考へるようになんぞ罰せられていたといった哲学者（ヘーゲル）もあるように、一たび禁断の果を食つた人間には、かかる苦惱のあるのも已むを得ぬことであらう。

明治四十四年一月

京都にて

西田幾多郎